

Y.S.C.C.監督
ひぐち やすひろ
樋口 靖洋 さん
インタビュアー えのきどりちろう



あなたが子どもの頃に抱いた夢は？ アスリートや一流の指導者が夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどりちろうさん。今回のインタビューゲストは、Y.S.C.C.監督の樋口靖洋さんです。

**ずっとチャレンジのタイミングを
考えていました**

樋口 □ トップチームの指導者としてのスタートは？

「マリノスがフリーゲルストと合併した1年目に「トップチームをやらないか」と。やはり育成年代を指導するのにもトップの指導経験が必要だと思っていた時でした。僕はプレーヤーとしてトップレベルの選手と長く一緒にやれなかった。だから本場の大人の世界を知らない。そんな負い目みたいなものがありました。39歳、プロとして契約をしました。

樋口 □ 日産自動車の社員をやめて、プロのコーチになられた。

樋口 □ ずっとチャレンジのタイミングを考えていました。それはこの先もサッカーで飯を食っていくために。そして、いつかまた育成の年代の子たちに還元するために。

育成との大きな違いは？

樋口 □ プロの世界ですから、選手たちは試合に出てなんぼなんです。試合に出られる、出られないという選手の心の葛藤をチームとしてひとつの方向にまとめられるか。育成と全く違う部

分ですね。僕が選手の時に感じていたことと同じように「使ってもらえない」という葛藤を持ちながらやっているような選手たちに対して、しっかりとアプローチをかけながら、前に向かっていく。

どういうアプローチを？

樋口 □ すべての選手に武器を出させて勝負させる。達成感が積み重なってチャレンジへの意欲になることを、僕は子どもたちへの指導で経験してきましたから、試合に出られない選手たちにもこの部分では勝負できることに気づかせて、勝負してやるという気持ちに仕向けるんです。僕の経験から言うと、例えば紅白戦で控え組が強い時、その週の公式戦はだいたい勝ちます。それはつまりチーム全員が必死にやっているということなんです。

なるほど。樋口さんがずっと現場で必要とされてきた理由がわかります。

樋口 □ 野球は監督がバントのサインを出したらバントしなきゃいけない。サッカーはシュートを打とうがドリブルしようが、それはそれぞれの判断。サッカーの魅力は主体的にプレイすることです。

自分は何をアピールしたらいいか一流の選手はそういうことを分かっています。だから自分が監督のチームは主体的な試合をしたいですね。

それは戦術的にはハードルが高いことではありませんか。

樋口 □ 高いです。すごく難しいですね。パターン化してトレーニングした方が、選手も覚えやすいし、型にはめた方が戦術の理解度も深まります。チームの勝ち負けを考えたらその方が早いのもしれません。自分としては嫌なんです。選手から主体性を奪ったらサッカーは面白くない。

2006年に山形の監督になられました。

樋口 □ 山形からオファーを受けた時、相談した岡田(武史)さんから「監督として経験積んで来い。監督として行くなら行って来い」「監督とコーチは決定的に違う。物事を決めるのが監督の仕事なんだ」と言われました。コーチって選手に「なかなか試合出られないけど、がんばれよ」「ちょっとお前、悩み事あんのか？」って、ある意味では軽く言えるわけです。だけど、監督は情を持つっちゃうと決断しにくくなる。監督とは切る決断するのが仕事なんだよ、と岡田さんは伝えてくれたんだと思います。決定権があるってことは、責任があるってことです。

うれしいのは選手が自分の判断で生き生きと試合をしていてくれる時

サッカーの監督さんって大変な仕事ですね。

樋口 □ グラウンドへ送り込んだ選手たちが自信を失くしたプレイをしている時は、自分が監督として失敗したな、間違っただなと思う瞬間です。うれしいのは選手が自分の判断で生き生きと試合をしていてくれる時。ミーティングや練習以上のことをやってくれている。まさに躍動する。そんな試合ができた時がすごくうれしいですね。

Y.S.C.C.では？

樋口 □ 「チームのスタイルっていうものをちゃんと

作らないといけない」と(吉野)理事長と確かめ合って、引き受けたんです。順位を上げるっていうのは僕の大事な仕事でコミットメントのひとつです。だからと言って、守って守って守備的に戦って順位がちよっと上がったけれども、次の年に何も残らないようなサッカーはどうなのか。5年後、10年後、20年後に続くサッカーのスタイルを構築する。チームのスタイルというものを大事にしなから順位を上げていくチャレンジをしよう、と、理事長は言ってくれたんで。僕のイメージする主体的なサッカーをやる、やらなきゃいけない。

即効性のある戦術ってたしかにあると思

いますが、そういうことではないサッカー哲学を大切にされてチャレンジですね。素晴らしいことだと僕は思います。

樋口 □ Y.S.C.C.はJリーグが始まる前に、地域から始まったチーム。そのトップチームである我々はどうであるというスタイルをさせなかつたらダメだと思っています。

取材を終えて

樋口靖洋監督は真っ正直な人だ。僕は取材を通じて、大変な感銘を受けた。試合後の監督会見でも、自分の采配の悔いを率直に口にされる。そんな監督さんはなかなかいない。大概はごまかしてしまうか、ほっかむりである。サッカーに対して誠実なのだ。このインタビューでも、育成コーチ時代の失敗例を具体的に語って下さった。失敗して学んだことを生き生きと伝えてくれた。サッカーは最高だ。樋口監督がその証拠だ。



Y.S.C.C.トートバッグプレゼント!!

P15読者アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で1名様にプレゼント!!